平城宮跡第111次発掘調査現地説明会資料　昭和53年6月24日

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では、推定第1次内裏・朝堂院地区の解明のため、継続的に調査研究を進めて来た。第1次朝堂院地区については、昭和42年以来、3回の調査が行われ、様相が漸次明らかになりつつある。今回の調査は、102次調査の南に接した約3500㎡の区画で、東第二堂の規模・朝堂建物の配置・第1次と第2次朝堂院に挟まれる地域の性格を明らかにする目的で行われ、現在継続中である。

Ⅰ　地形および遺構の概要

朝堂院造営以前のこの近辺は、南に緩く傾斜する谷地形の黒色粘土の湿地帯であり、朝堂院の造営に際して整地を行い、平坦に造成している。今回の調査で確認した整地土は、大きく見て4層あり、第1次整地土のバラス混り灰白粘質土は、発掘区東辺では第2次朝堂院地区の整地土（黄褐粘質土）の上に重なっている。第2次整地土は灰黒粘土・暗灰粘土であり、これらの土で平坦に整地した後、黄褐粘質土で朝堂基壇・塀基壇を作っている。検出した遺構は、朝堂院造営以前（A期）・朝堂院造営以降廃絶まで（B期）、廃絶後（C期）の3期に分けられ、これまでの調査と大きく矛盾するところはない。

A期　遺構は第1次整地土の上に造営されている。南北溝（SD3765）は、部分的にしか検出していないが、この時期に於る宮中央部の基幹排水路である。南北塀（SA8410）はSD3765の東17.5 mの位置にあり、先の調査分と合せて43間分129 mを検出したことになる。この柱掘形には前回同様、柱痕跡は見あたらない。溝（SD01）は第2次朝堂院に近い位置に掘られたL字状の溝で、幅約0.6 mである。

B期　B期は第2次整地土の上に造営された遺構で、朝堂院区画と建物を構築し、これに伴ない基幹排水路SD3765を埋め立て、東に南北溝SD3715を掘削し、周辺を整備する時期である。

東第二堂（SB 8550）　東第二堂は、基壇及び礎石据付跡を検出した。礎石据付方法は、まず径約1.5 mの掘形を掘り、河原石を詰めて根固めし、その上に礎石を据え、割石をかませて安定させている。東側柱・入側柱筋の根固め石の遺存状況は、前回の調査と比べて良好で、これらをすべて検出し、柱間を推定する上での好資料である。東第二堂は、梁間4間（3.3 m等間）の東西廂付南北棟で、102次検出分と合せて、桁行12間（4.5 m等間）分を検出したが、更に南に延びる。基壇は、残りの良い部分では、約1 mあるが、元来は2 m以上の高さであったと想定される。また径30㎝程の小穴が、柱位置の四周・棟通り・軒先に配され、建設に際しての足場（SB8555）と考えられる。第二堂の掘込地業は、第一堂から連続して行われ、その東西幅は、約19mある。この掘込地業の縁辺には、千鳥状に配された杭列（SX12）があり、基壇版築の際の堰板を固定したものであろう。西側の掘込地業の外側には、南北に通る、9尺（2.7 m）間隔の杭列（SX13）が配され、やはり、基壇築成地業と関連するものと思われる。二条の東西溝（SD14・15）は、西方から第二堂に至る通路の側溝と考えられる。

南北塀（SA 5550）　東を画す南北塀は、塀（A）→塀（B）→築地（C）と変遷する。塀Aは、掘立柱を据え付けた後、基壇を築成している。塀Aの柱を抜き去り、同位置に柱を立て替えたのが、塀Bである。その後、塀は築地に改修される。築地Cには、門（SB10）が開く。SA5550の変遷に関しては、前回の調査結果と見解が異なるが、これは今回の調査で、新たに、柱掘形を検出し、塀Bの存在が明らかになったためである。

南北大溝（SD 3715）とその周辺　SA5550の東18mの位置にあり、幅約3 m・深さ約1 m。溝は、上下2層あり、天平初年頃に改修されている事が、102次調査で明らかになっている。柱穴SX09は、SD3715の西岸に掘られた2対の柱穴で、松材の角柱を留めるものもある。架橋とも考えられるが、東岸には柱穴はない。SD3715の東岸に沿って、南北塀（SA07）、鍵の手状の塀（SA08）がある。SA01の東に掘立柱の東西廂付南北棟建物（SB06）がある。柱間は、ばらつきがあるが約10尺で、4間×9間分を検出した。径10㎝程の細い広葉樹の柱根が残り、仮設的な建物と考えられるが、性格は不明である。第2次朝堂院の近くに掘られた南北溝（SD03）は、91次調査で検出した第2次内裏の西外郭の南門に通ずる道路SF04の西側溝で、この道路敷に鍵の手状の暗渠SX02があり、SD03が掘られた後、これに接続する。発掘区東北隅には道路敷を切る大土壙（SK05）があり、出土遺物から天平勝宝以降に掘られたものである。

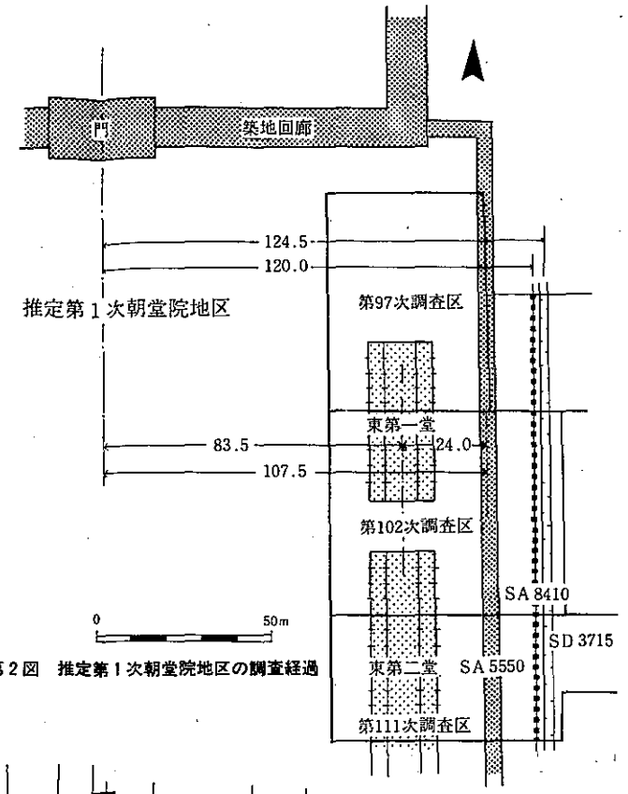
C期　朝堂院の廃絶後、朝堂と東方の南北塀の間は、鍛冶工房として利用された一時期がある。SA5550の近辺には、焼土の詰まった穴が掘られており、鉱滓やふいごの羽口が出土した。鍛冶工房の後、SB8550とSA5550の間の一段低くなった部分に瓦を埋め込み、平坦にならしている。この瓦層には、瓦器や灰釉陶器が含まれており、平安時代以降の仕事である。

Ⅱ　出土遺物

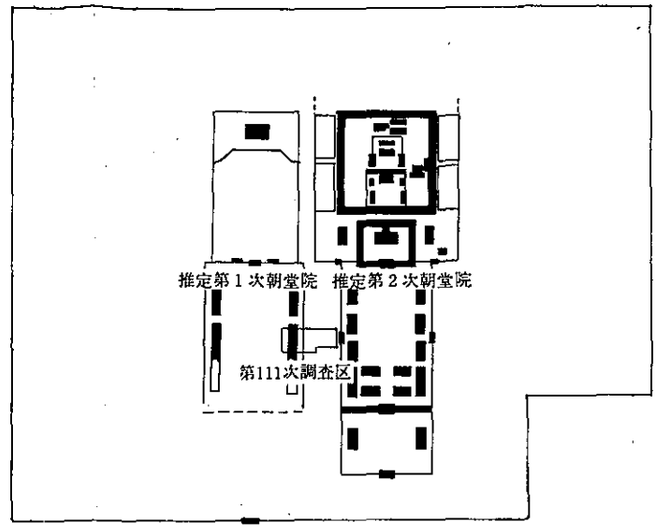
SD3715以外の地区での土器の出土量は、極めて少ない。この地区の性格と関連するのであろう。SD3715からは、墨書土器・土錘等が出土している。軒瓦は、総数1,000点近く出土しているが、その7割が朝堂東側の瓦層から出土した。瓦層には、Ⅰ～Ⅳ期までの瓦を含んでいるが、Ⅱ期（神亀～天平末年）の瓦が圧倒的に多く、Ⅲ・Ⅳ期の瓦は極めて少ない。Ⅱ期の瓦の内でも、桧皮葺屋根や、築地の棟に使われる小型瓦の6313・6685型式が5割以上を占める。第一堂では、6313・6685型式は、ほとんど出土していない。木製品の多くは、SD3715から出土したもので、杓子状木製品・曲物の底板等がある。木簡は、SD3715から、約30点出土しており、その下層から神亀5年の年紀をもつものが1点出土している。

Ⅲ　む　す　び

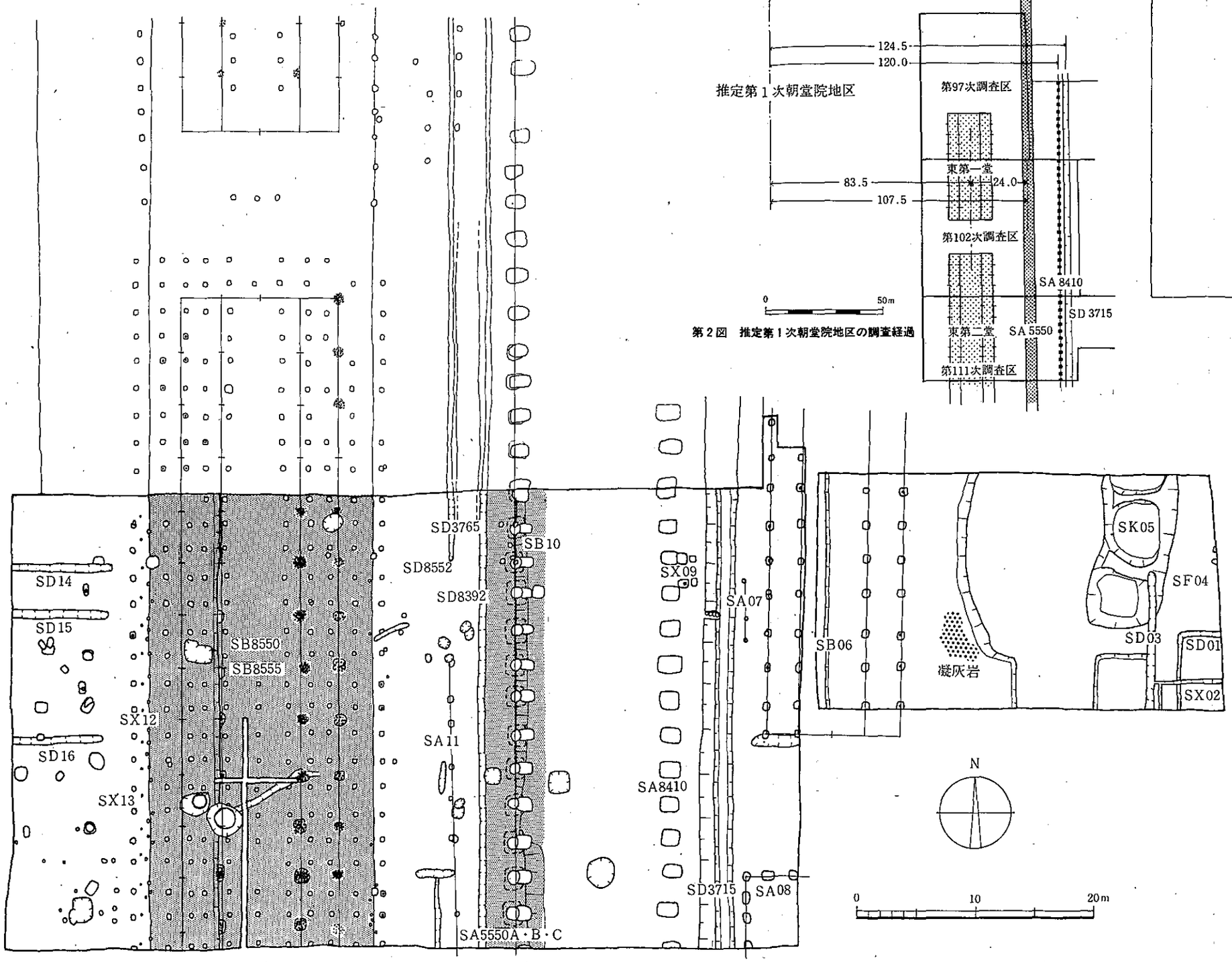
今回の調査では、第二堂の規模は把握できなかったが、発掘区の中央から始まる土壇は南に延びており、第1次朝堂院の南北長が、第2次朝堂院の大極殿前の回廊から、十二堂院南門（平安宮会昌門）までの距離と同じならば、第1次朝堂院の朝堂配置は、第2次のそれとは異なり、東西に各2棟の南北棟が配置されている可能性が強くなった。



第２図　推定第１次朝堂院地区の調査経過



第１図　平城宮略図



第３図　平城宮跡第111次調査発掘遺構略図

推定第1次朝堂院 地域別軒瓦比較表

軒丸瓦型式	41次	97次	102	111次	T
	%	%	%	%	%
藤原宮式	33	17	11	5	10
6225	10	18	34	19	24
6282	0	2	2	1	2
6284	3	11	18	13	14
6304	0	4	3	1	2
6308	0	2	0	0	1
6311	3	6	7	2	4
6313	0	3	4	41	22
出土総個体数	30	89	299	401	819

軒平瓦型式	41次	97次	102次	111次	T
	%	%	%	%	%
藤原宮式	47	15	22	4	12
6663	19	24	27	19	19
6664	25	25	32	32	27
6685	0	0	2	32	15
6691	3	3	2	1	1
6721	0	2	2	4	3
6732	0	0	2	1	1
出土総個体数	32	55	250	330	767

	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	第Ⅴ期
年次区分	和銅元年～養老5年	養老5年～天平17年	天平17年～天平勝宝年間	天平宝字元年～神護景雲年間	宝亀元年～延暦3年